

---

# カナデルキボウ

勇輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カナデルキボウ

### 【Nコード】

N1107J

### 【作者名】

勇輝

### 【あらすじ】

数ある球技で最も過酷と言われるスポーツ、バスケットボール。

このお話は1人の少年と1人の少女のバスケの物語である。

## ブローグ

某体育館。

バスケットシューズ、通称バツシユのスキル音とボールの弾ませる音、ドリブルする音が体育館中に響く。

中学校の全国大会、全中の試合が体育館で行われている。

スコアは両校56対56。1点でも取れば逆転のシーソーゲームが続いている。

残り時間10秒。もう時間がない。

「木下！」

木下と呼ばれた男は、パスされたボールを取る。

残り時間3秒。最後の1シュートで勝敗が決まる。

木下は、ノーマークで3ポイントシュートを放つ。綺麗なループを描いてボールがリングに吸い込まれていく。

そして、そのボールは綺麗にリングを突き通った。試合終了のブザーが鳴る。

「よっしゃあー!!!!」

「勝ったー!!!!」

その後、優勝した中学校は永遠の歴史に刻まれたと言う。

## ブログ（後書き）

初めましての方は初めまして！勇輝です！

久々にまた学園物書いてみようかなって思い書いてみました。  
こっちは週1のペースで更新していこうかなって思っています。  
では、これからもよろしくお願いします！

## 第19 奏と希

僕の意識の遠くから喧しい音が聞こえる。

喧しい音のせいで僕の意識は、どんどん薄くなっていく。

分かったぞ、目覚ましの音だな。

僕は、眠い体を起こして下に行く。

昔は全然起きなかつたけど、今日は別だ。何故なら、今日は入学式だから。

僕は、部屋を出て1階に行く。

僕のお父さんと、お母さんが朝ごはんを食べていた。

「兄ちゃん、おはよー！」

……忘れてた。

こいつは僕の弟、音也。おとやっていうんだ。

あ、僕の名前を言うの忘れてた。僕は、奏。かなでつて言う名前。

僕の名前の由来は、お父さんもお母さんも音楽が大好きで、音楽にちなんだ名前がよかつたみたい。

だから、僕の名前は演奏の奏をとってかなでつていう名前にしたんだって。弟の音也も同じ理由。

僕はトーストを食べていく。お母さんが話しかけてきた。

「奏、今日入学式でしょ？」

「うん」

「制服は、そこにおいてあるからそれ着ていきなさいよ」

僕は眠くてあまりお母さんの話を聞いていなかった。

でも、制服がそこにあるのはわかった。

僕は急いで朝食を食べ、制服を持って2階に行く。

自室に入ると早速着替え始める。  
うわ、着にくいなあ……。

「こんな感じかな」

僕は鏡を見ながら後ろを見たり、前を見たりする。

問題はなさそうだ。

すると、朝必ず聞く女の子の声があった。

「奏ー！ 起きてるー？」

僕は窓を開ける。

すると、いつもの子がいた。

「何？ 起きてるよ」

「制服着てみた？」

「うん、なんか着にくい……」

「見せてよー！」

そういわれて、僕は回転する。

ちなみに、さっきの女の子は希。のぞみっていうんだ。

本名は櫻井希。さくらは桜じゃなくて櫻なんだ。

昔からいつも一緒だったから、恋人って思われた事もあるけど本当は幼なじみ。

全く勘違いしないでよって思う。

「私のどう？」

希も回転して僕に見せてきた。

容姿も関係してくるのか、なかなか良く見えた。

「いいんじゃない？」

「本当！？　じゃあ、また学校でね！」

希は窓を閉めた。

僕もいそがなくちゃっ。

中学校に向かう途中は僕と同じ制服を着ている子達が沢山いた。皆同じ新入生なのかな。

「奏ったら、なんでそんな顔するの？」

希は僕の顔を下から覗き込む。

「え？」

「なんでそんな心配な顔するの？」

「なんか、緊張というか……」

「ふふっ！　奏らしい！」

軽く笑って、僕をからかう。

小学校のころから行きも帰りもずっと一緒だった。

昔、希は虐められた時期もあったのでそれ以来ずっと一緒に帰っている。

中学校に着くと、クラスの名簿が張り出されていた。

僕はB組で希はC組。

僕は、下駄箱に靴を入れて校舎の中に入っていった。

## 第29 誘われたんだ

僕は校舎に入り、B組に向かう。

同じ小学校の子が沢山いるといいなあ、なんて思っている僕。だって、味方が沢山いたほうが良いじゃん。

僕はB組のドアを開ける。

中には、あまり知らない顔ばかりだった。僕はちよつとがっかりしたが、それは一瞬で吹き飛んでいった。

「奏！」

「あ、勇太！」

目の前に現れたのは、いつもとは違う髪形をしている僕の友人だった。

この子は、しろやまゆうた白山勇太。僕の同級生で一番仲が良いんだ。でも、ちよつと性格は乱暴だけど、本当は凄く優しい子なんだ。

「勇太、B組？」

「ああ！ そろそろ入学式が始まるみたいだな」

勇太は体育館シューズをもって、体育館へ向かう。僕も、勇太についていった。

そして、体育館に着くと沢山の新生がいた。

それもそのはず。この「松栄中学」は私立でも人気の中学。

受験者も今年は特に多く、普通はC組までだけど特別にD組まで作られたとか。

体育館は広く、大きかった。

「ああ〜今年もバスケやろうかな」



「勇太ってバスケット部はいるの？」

「おう！ 奏もやらねえか？」

「え、あ、いや……怖いし、危ないし、僕運動苦手だし……」

僕はあまり球技が好きじゃなかった。

というのも、昔は体操はやっていたので運動神経はあるけど、球技は苦手だった。何故か。

「そっか、お前とバスケットしたいなって思ってたんだけどな」

「第一僕、背低いし……」

僕の身長は、実は143cm。とても背が低い。

だから、バスケットなんてとてもじゃないけど出来ない。

「でも……今年なんか部活やりたいし……」

そついうと、勇太は軽く笑った。

「じゃあ、バスケットしようぜ！ 絶対楽しいからさっ！」

「う……うん、見学だけでも……」

「よっしゃ！ じゃあ決まりだな！」

勇太はとても喜んでる。

僕、そんなにやりたくないけどまあ勇太がそこまで言うなら……。やってみようかな。

校長先生の長い話が終わると、入学式は終わり家に帰ることになった。

帰りは当然、希と一緒に。

他の子は、みんな電車で帰るし、勇太は、違う方向なので別れた。

希は、なんか楽しそうだ。なんでだろうか。

「なんで、そんなテンション高いの？」

「だってー、なんか面白そうじゃん！」

「面白そう？ 何が？」

「面白そうじゃん、私立の中学生生活って！」

希は昔から、楽しそうな事があると凄くテンションが上がる。それが希の長所でもあり、困ったところでもある。

「ハハハ……まあそうかもね」

「奏、部活入らないの？」

「僕？」

「私、バスケ部入ろうかなっておもってるんだ」

「なんで？」

「誘われたから！ やらないって」

僕と一緒に。勇太もやらないうって誘われたし。

「僕も、やろつかない。バスケ」

「へ？」

「僕も誘われたんだ。勇太に」

「じゃあ、私達仲間だね！」

希はウインクを僕に見せてくる。

実はここだけの話、希のウインクは殺人並みの威力を誇る。

つまり、男の人は大体やられる可能性が高いという事だ。

僕も昔初めてウインクをやられた頃、不覚にも可愛いと思ってしまつたぐらいだ。

「そうだね！ 頑張ろう！」

「オー!!」

こうして、長い中学生生活が始まるつとじていた。

第29 誘われたんだ（後書き）

実は作者の僕もウィンクには弱いです（笑）

### 第39 俺、木下って言うんだ

始業式も終わり、部活の見学が出来る放課後、奏はバスケット部を見学に来ていた。

奏は見ていて凄いなと思った。その迫力、熱気、実力に。

しかし、どうも拍子抜けだなあと感じたのは部員の人数だ。全部で4人しかない。

「これって試合でねえよな……？」

隣にいた勇太が言う。

バスケットは1試合5人必要だ。4人では人数不足で出る事はできない。

「そうなんだ……」

しばらく喋りながら、見ているとある先輩が大きく半円のように引いてある線からボールをもらう。

先輩はボールをシュートする。綺麗なループを描き、ボールはゴールに吸い込まれていった。

そして、リングにかすらず、網だけの音が聞こえた。

「凄い……」

僕はつい呟いてしまった。

だが、その言葉は嘘ではない。純粹にカッコいいと思ってしまった。すると、さっきシュートを放った先輩がこっちに近づいてくる。僕たちの目の前で止まる。

「君たち1年生だよな？」

「はい」

「今体操服もっているかい？」

「ええ」

「よかつたら、体験してみないかい？ あそこの更衣室で着替えてくれば良いからさ」

先輩に言われて、僕は渋々、いや、嫌々着替えたといったほうが正解だろう。

だが、勇太はワクワクしていた。

凄いなあ、勇太は。相変わらず性格は昔から変わっていないなあ。

僕は体育館シューズを履いて体育館のコートに戻る。

先輩達は黙々と練習を続けていた。

僕は、ボールを先輩に渡されてボールをついてみなよと言われる。

僕は、先輩に言われるようにボールをついてみる。

ああ、なんか低い「シ」の音がする気がするな……。つて、バスケしているのに何で音楽になるんだ。でも面白い。

球技が嫌いで嫌いで仕方が無いのに、面白くてワクワクする。

「どう、面白いでしょ？」

「はい！」

僕は大きい声で言った。

あれ、そういえば僕、先輩の名前聞いていなかったや。

「先輩の名前は何ですか？」

「俺？ 俺は……」

先輩はボールを指の上に乗つけて、くるくると回す。

僕は、それについ見とれてしまった。

「俺は木下っていうんだ、よろしくー!」

第39 俺、木下って言うんだ（後書き）

遅くなつてすみませんでしたあああ！！

感想、指摘諸々あれば是非教えてくださいね！  
よろしく願います！



## 第4q 自己紹介したのか

「俺は木下っていうんだ、よろしく!」

木下先輩は、後ろを振り返る。

すると、後ろには先生らしき人がいた。靴を履き替えているのだからか。

木下先輩は表情を変えて叫んだ。

「集合!!」

体育館中に声が響き渡る。

部員が走って木下先輩のところが集まってくる。

そして、先生もこっちにやってくる。

そして、先生は開口一番喋ったのは……。

「この子達は新入部員か?」

「いや、体験です」

木下先輩が、先生の質問に答える。

「そうか、自己紹介からするか。俺は松本秀斗<sup>まつもとしゅうと</sup>。29歳だ。昔はS<sup>シューティ</sup>ングガード<sup>ンゲガード</sup>を担当していた。よろしく」

松本先生が簡単に自己紹介をする。

途中に話したSGというのがよくわかんなかったけど、一応スルーする。

あ、今のギャグじゃないよ?

「そういえば、お前から自己紹介したのか？ していないなら今しておきな」

先輩達はおろおろするが、一人平然としている先輩がいた。

「ったくもう、お前らつつせえんだよ。自己紹介ぐらいさっさと済ませるよ」

喋り方が怖い先輩だなあ……。

僕はつい、後ずさりをしてしまう。

っていうか、身長高いなあ……。何センチなんだろう。

「俺は、竹内力也。<sup>たけうちりきや</sup>身長184センチ。2年。ポジションはC。<sup>センター</sup>よろしくな」

184センチ！？

しかも2年生で！？通りで大きいわけなんだ。

でも、あまりこの人とは関わりたくないなあ……。怖い。

「じゃあ、次俺ね。<sup>さとうつかさ</sup>佐藤司。2年生で、ポジションはPG。<sup>ポイントガード</sup>一緒にがんばろう！」

優しい先輩だなあ。

しかも、かなりカッコいいし……。彼女とかいるんじゃないかな？ この人も2年生なんだ。

「よっしゃ、俺やな！ 俺、<sup>さわだあきひ</sup>沢田晃！ 身長163センチ！ ポジションはSF！<sup>スモールフォワード</sup>体重は51キロ、趣味はTVを見ること……」

「おい、晃そんなに紹介しなくてもいいだろ」

「まあ、最初やし、ええやんか」

部員全員が笑う。この先輩面白そうだなあ。  
しかも、関西弁ということは関西出身なのかな。

「じゃあ、最後に俺か。俺は、木下淳<sup>きのしたじゆん</sup>。中3でポジションはSG。皆で全国行こう！」

やっぱり木下先輩はかっこいいなあ。  
僕の憧れの先輩かも。

「さて、体験の子も一応自己紹介してもらおうか」

先生が、僕たちに目を向けて話してくる。  
勇太が先に前へ出て喋りだす。

「僕は白山勇太です。小学校の頃は、PF<sup>パワーフォワード</sup>をやっていました。身長は155センチです。よろしくお願いします」

紹介が終わり、部員の目は僕に飛んでくる。  
え、何をしゃべればいいんだろう……。バスケなんてやった事ないし。

「ぼ……僕は、高野奏です。身長は143センチぐらいでバスケは今まで体育しかやった事ありません。役立たずかもしれませんが、頑張ります」

恥ずかしくて顔を下に向ける。  
うわあ、恥ずかしくて前をむけないよ……。

「何をいつてんねん！ 1から教えるだけのことやん！」

「え？」

「最初はだれでもそうだ。俺も協力はする」

沢田先輩と竹内先輩が言う。

竹内先輩、怖いけど本当は優しい人なんだ。

「さあ、ここから全国大会優勝を目指していくぞ！！　まずは市総

体の優勝だ！　気合入れていくぞ！！」

「「「おう！！！！」「」」

部員の声が一つにまとまって体育館中に鳴り響いた。

## 第5話 アメリカのバスケット

僕は帰り道を痛い足を引つ張るようにして帰った。

幸い僕の家は学校から近いので、そんなに苦労せずすむのだが。家に着くと、玄関の明かりはついておらず、家には誰もいないようだ。

「また希の家か……」

僕は希の家のインターホンを鳴らし、中に入っていく。すると、玄関先で希がまだ制服姿で立っていた。

「おかえり！」

「なんで、まだ制服なの？」

僕は希を見ると、制服にある異変が起きている事に気付いた。

それは、スカートの丈が前よりかなり短くなっているのだ。

恐らく、先輩から短くする方法を覚えてもらったんだろうなと僕は考えた。

「だって、これ気に入っているもん」

「いいから、自分の部屋で着替えてきなよ。僕は希の母さんに頼んで夕食食べさせてもらうから」

「わかったわかった」

希はそういって、自分の部屋へ戻っていった。

僕はそのまま1階のリビングに行き、用意されていた夕食を食べた。毎回のことなので、悪い気など一切起きない。

普通に食べていると、テレビでなんかの試合が放送されていた。ど

うせ、野球だろうと思った奏は野球に興味は無いと思い、普通に黙々と食べ続けた。

希がドアからリビングに入ってくる。もういい加減制服に飽きたのか、普通の部屋着になっていた。

テレビから大きな歓声が沸きあがる。野球でもこれほどの歓声は起きないっていうぐらいの歓声だ。

ちょっと気になってテレビをみると、なんとバスケの試合が放送されていたのだ。ただ、日本のバスケではなく、アメリカのバスケだった。

奏は箸を休め、テレビに夢中になった。

スコアは92 - 100。最終クォーターだ。残り時間は1分23秒。負けているチームが「ライカース」という名前で、勝っているチームが、「トバリアーズ」という名前だ。

ライカースが得点を決めて、トバリアーズが普通にボールを外から出すと、ライカースの選手がボールをカットし、そのままダンクを決め付ける。

また、歓声が沸きあがり、英語の実況が入る。

「Ooby turned on a splendid dunk!  
it is an ace! (オービーが華麗なダンクを決めた! 流石はエースだ!!)」

英語の分からない奏でもダンクという言葉と、エースという言葉は分かった。

このオービーというプレーヤーがチームのエースなのだろう。

残り時間が1分をきり、点差はなお、6点差。相手も時間が時間でたっぷり使ってじりじりと攻撃を仕掛けてくる。

苦しい展開のライカース。その時、奇跡は起きた。

ドリブルボールを奇跡的にカットしたのだ。そのまま、ボールをドリブルし速攻を仕掛けレイアップでフィニッシュする。

点差は4点差に減った。相手がハーフコートに来たところで残りの時間は58秒。またしても相手は時間をギリギリまで使ってシュートを打つ。

しかし、相手のシュートは外れ、リバウンドをライカースが奪取する。そのまままた速攻を決めるところで相手のエースとライカースのエースとの勝負になった。

ライカースはドリブルでゴールの近くまで行き、大きくジャンプをする。相手も負けじとジャンプし、ボールを叩き落とそうとする。だが、それでもエースはボールをゴールにたたきつけた。

その瞬間、笛がなった。実況者がこう言う。

「A basket count! a one throw!!  
(バスケットカウントでワンスローを獲得だ!)」

これで、ライカースは得点が認められ、点差は2点に減った。

その後のフリースローを順調に決めて点差は1点になり、ワンシュート差まで持ち込んだ。

ライカースが何としてもカットしようとコート内を必死に暴れまくる。時間は25秒。このチャンスがラストだ。

奇跡は、1度ではなかった。2度目もカットに成功したのだ。

エースが再びボールを手にし、豪快なダンクを決めて、ゲームを勝利に収めたのだった。

それを見ていた奏はもう虜になっていた。

「僕も……やりたい!!」

「え?」

希が聞き返す。

「僕も……あんなプレイヤーになって、皆を感動させたい!」

それを聞いた希が、奏の近くまで来て後ろから奏の華奢な肩にもたれかかってきた。

「私も……おっえんしてるよ」

希はポツリと言ったのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1107j/>

---

カナデルキボウ

2010年10月10日20時19分発行